市長メッセージ 76

平成25年を振り返って

熱海市長　齊藤　栄

富士山がユネスコの世界文化遺産に登録となり、東京が２０２０年オリンピック・パラリンピックの開催地に選ばれ、熱海市でも熱海駅前バス・タクシー広場の供用開始や新庁舎建設着工、ジャカランダ遊歩道の一部完成などの出来事があった平成25年も残すところあとわずかとなりました。

明治、昭和に続く「第３の成長期」を目指し、平成24年度に「新生（リニューアル）熱海」を掲げ、その実現に向けた道のりを歩み始めましたが、平成25年はその歩みをさらに前進させる年であったと思っています。現在も新生の第１ステージとして３大建設プロジェクトの「市庁舎建設事業」「熱海駅前広場整備事業」「新生熱海中学校建設事業」や「ジャカランダ遊歩道整備事業」が着実に進められており、そのいずれもが今年度末にひとつのメドがつく見込みとなっています。

現在このように新生への取り組みができるのも、平成19年度から5年間にわたる厳しい行財政改革に市民の皆さんが協力してくださった成果であると感謝しています。

しかし新生への道のりはまだ始まったばかりです。来るべき平成26年は、現在行っている第1ステージの取り組みに続き、旧岡本ホテル跡地の活用をはじめとする第2ステージの取り組みに着手していくこととなります。今後とも、熱海が新しく生まれ変わる「新生（リニューアル）熱海」の実現に向け、一歩づつ着実な歩みを市民の皆さんと一緒になって進めてまいります。

広報あたみ2013．12月号掲載

市長メッセージ 75

小布施から学んだこと

熱海市長　齊藤　栄

先日、長野県小布施町へ産地交流を目的に出張してきました。皆さんは「小布施（おぶせ）」と聞いて何を連想しますか？多くの人が高級感のある「栗のお菓子」ではないでしょうか？しかし私が印象的だったのは「街並み」と「図書館」です。

小布施の街を歩いて感じたことは、何と言っても「街並みの美しさ」です。店の外観そして街の佇まいも本当にセンスが良いのです。人口約1万1千人で観光エリアはほとんど徒歩圏の小さな面積ですが、次々と観光バスが町の中心地を訪れ、多くのカップルや家族連れで溢れていました。小布施町長によれば、小布施の修景事業は1980年代から始まり、官民が一つになって30年間やり続けて今日に至っているということです。事業開始当時小布施町は過疎化が進み、大きな危機感を持って将来への投資に取り組んだのです。

また街並みのほかに、小布施町にはさらに見るべきものがありました。それは「ライブラリー・オブ・ザ・イヤー2011」を受賞した町立図書館「まちとしょテラソ」です。この図書館を立ち上げた当時の館長の「これまでの図書館のイメージを壊したい。人が集い交流する場をつくりたい」という言葉が印象的でした。館内は大声でなければお喋りはOK。お弁当を食べる机もあり、音の出るイベントも館内で開かれます。特に重視したのが市民参加。小さなことでも市民が徹底的に議論をして決めたそうです。小布施町の取り組みから多くを学んだ出張でした。

広報あたみ2013．11月号掲載

市長メッセージ 74

2020年東京オリンピック

熱海市長　齊藤　栄

2020年のオリンピックとパラリンピックが東京で開催されることが決定しました。日本中を元気にさせる、久々に明るい話題です。

前回の東京オリンピックが開催されたのが昭和39年、私が生まれた翌年です。夢の超特急「東海道新幹線」も開通しました。当時の新聞（地元紙）を図書館で調べてみると、「世界的観光地」「観光客も3倍に」「着々進む都市計画」などの見出しが躍ります。実際に、熱海駅前の再開発、海岸部の埋め立てなどの大型公共事業が行われ、大規模ホテルが続々と建設されました。またその頃、熱海市の人口そして宿泊客数ともそのピークを迎えました。熱海市はまさに、戦後の高度経済成長期にあわせて大きな発展を遂げたのです。

一方で予想外ではありますが、新聞紙面には「オリンピック不景気」という見出しも載っていました。オリンピックの期間中に限っては予想したほど外国人は来熱せず、国内観光客も大きく落ち込んだようです。このことは、次期東京オリンピックの際にも頭に入れておく必要があります。

熱海市はこれまで明治中頃から大正にかけて、そしてこの昭和の高度経済成長期の二度大きく発展しました。そして現在、第3の成長期を作らなければならない時期に来ています。東京オリンピックが開催される7年後の2020年をそのひとつの目標年として、海外誘客に力を入れるとともに、戦後整備してきたインフラ（社会資本）のリニューアルを進め、熱海の新生を進めてまいります。

広報あたみ2013．10月号掲載

市長メッセージ 73

大島旅行記

熱海市長　齊藤　栄

この夏は休暇をいただき、妻と大島に行ってきました。熱海から島影が望める大島ですが、一度ゆっくりと訪問したいと思っていました。高速ジェット船でわずか45分、船内は満席でした。

初日は三原山へ。三原山はこれまで何度も噴火を繰り返し、直近の噴火は昭和61年です。山頂から噴火口まで約1時間を馬に乗って登りました。馬の背から見る風景はいつもより視点が高いため、新鮮でとても開放感がありました。ガイドさんに手綱を引いてもらい、馬の背に揺られてゆっくりと進む中で、神経の疲れがすっと取れて行くような気がしました。日陰のない炎天下の中、何度か休憩を入れながら、やっと噴火口に到着。噴火口は直径約400メートル、深さ約250メートルの巨大なもので、溶岩の流れた跡を眺めながら、ジオパークの大地のパワーを満喫しました。

翌日は波浮（はぶ）港に。熱海にゆかりのある中山晋平が「波浮の港」を作曲しており、訪れてみたいと思っていたためです。波浮港はかつて漁港として大きく栄えた港町です。川端康成の「伊豆の踊子」は、波浮港を拠点に伊豆の各地で宴席の踊りを披露していた踊り子がモデルです。漁港を見守るように建つ神社、海水浴客、地元消防団による監視員。ゆったりとした島の時間が流れていました。

最終日はお土産を物色。地のものと言うことで特産の「あしたば」を使ったサブレを買いました。しかし熱海に戻ってきてびっくり！なんと製造元が熱海市内だったのです。ご縁が深いのですね。

広報あたみ2013．9月号掲載

市長メッセージ 72

「ジャカランダサミット」

熱海市長　齊藤　栄

6月中旬に長崎県雲仙市小浜町で行われたジャカランダサミットに参加しました。ジャカランダと街おこしをテーマとした会議ですが、ここで私は長崎と熱海の深いつながりを感じました。まず会場となった小浜温泉の海岸に面した昔の風情を残す姿が、熱海市街にそっくりなことに驚きました。また、同町近隣の大村市は熱海梅園そして喰滝館の提唱者である長与専斎の出身地です。会議の中で明治時代に内務省初代衛生局長として、その後の熱海の発展に大きな貢献をした専斎の話をしたら、ありがたいことに、大村市議会議員の方が私の話に感激したと声をかけてくださいました。

翌日は宮崎県の日南市南郷へ。南郷は日本で最大のジャカランダの群生地です。その数約7百本。山腹から臨む海、島、そしてジャカランダの取り合わせは絶景そのものでした。そして何より実感したことはジャカランダの人気です。この紫色の美しい花を咲かせる南米原産の花木を見るため、福岡など九州各地や、遠くは関西から多くの観光客の皆さんが来ていました。その参加者の多くがジャカランダを愛する女性たちです。

現在、お宮緑地がジャカランダの遊歩道として生まれ変わりつつあります。既に東京側半分が完成し、来年には全体が完成する予定です。苗木は現在1m50cmほどですが、4～5年で4～5mに育つそうです。遊歩道には緩やかな起伏があり、熱海湾そして初島をゆったりと臨むことができます。是非、お宮緑地で気持ちの良い散歩をお楽しみください。

広報あたみ2013．8月号掲載

市長メッセージ 71

私の健康法

熱海市長　齊藤　栄

時々、「市長の健康法は何ですか？」と聞かれます。心身の健康はすべての基本です。日頃、健康のため、私なりに行っていることがあります。

一つ目は温泉です。今年に入って、毎日温泉に入れる環境になりました。マンションの温泉の引いてある部屋に引っ越したのですが、その効果は絶大です。特に冬の間は、入浴後いつまでも体が冷めません。この冬は一度も風邪をひきませんでした。血行も良くなり、疲れも取れ、温泉地に住まうことの最大の特権です。

二つ目はマリンスパあたみで参加している運動プログラムです。通い始めて、もう数年になります。エアロビクスと筋力トレーニングを組み合わせた1時間弱の運動で、真冬でも全身汗びっしょりになって、ストレス解消に最適です。ゆったりとした音楽を聞きながら、ストレッチ体操で締めくくるので、神経も休まります。週1回行くことを目標にしているものの、なかなか思うようになりませんが、細く長く続けています。

三つ目はテニスです。テニスは学生時代から始め、就職してからも続けている、私が一番好きなスポーツです。実は先日、7年ぶりにテニスをしました。市長就任以来はじめてです。大好きなテニスですが、今まではテニスをする余裕がありませんでした。久しぶりのテニスコートは本当に爽快で、1時間ほどのプレーで、だいぶ調子が戻ってきました。健康維持のためにも、時間を見つけて続けていきたいと思います。

広報あたみ2013．7月号掲載

市長メッセージ 70

33年目の同窓会

熱海市長　齊藤　栄

ゴールデンウィーク明けの週末、私の卒業した都立高校の同窓会を熱海で行いました。自分は今年で50歳、卒業して早33年になります。御年80歳になる当時の私の担任の先生を含めて総勢43名も集まった一泊二日の熱海旅行です。33年ぶりに会う同級生もいて、本当に楽しいひと時でした。

初日はあいにくの雨と霧の中、観光バス「お宮号」に乗っての市内ツアーを行いました。熱海城や十国峠にも登ったものの何も見えず、風も強かったため、皆ずぶ濡れになってしまいました。ホテルに戻ってから温泉で身体を温め、高校時代の夢を実現してプロの歌手となった同級生が、夕食の席上で歌を披露しました。

2日目は、打って変わっての晴天で、イルドバカンス号に乗って初島へ向かい、灯台から相模湾の360度大パノラマを堪能しました。皆、イカ丼ぶりやところ天などの海の幸を喜んでいました。

国語を教えていた恩師は、「熱海は天下の熱海。日本の『近代』がギュウ詰めになっている熱海」と表現しています。自分は高校時代、将来本当にやりたいことに悩み、この先生の所へ相談に行ったことがあります。その時にあるアドバイスをいただいたのですが、その時の言葉が今の私の仕事につながっています。

これまで自分は、この恩師も含めたくさんの人に助けられ、そして支えられてきました。「もともと好きだった熱海が、ますます魅力的になった」恩師にそう言ってもらえるよう、これからも頑張っていきます。

広報あたみ2013．6月号掲載

市長メッセージ 69

「頼朝と政子」

熱海市長　齊藤　栄

最近、伊豆山神社が恋のパワースポットとして人気を集めています。これはかつてこの地で源頼朝と北条政子が愛を育んだことに由来しています。

4月15日、伊豆山神社例大祭の神幸行列に妻とともに、頼朝と政子の衣装を着て参加させていただきました。頼朝行列は十数年間途絶えていたようですが、地元の皆さんからのお誘いがあり、伊豆山神社が頼朝と政子のゆかりの地であることを全国にアピールできればと考えてお受けしました。当日は風が強かったのですが、素晴らしい晴天に恵まれ、妻も「大変光栄な機会をいただいた」と喜んでいました。

神幸行列の最中、実はちょっとしたアクシデントがありました。行列が始まってすぐ、境内の階段を下りている時に、私のかぶっていた烏帽子が強風にあおられて、はるか眼下の林の中へ落ちてしまったのです。探そうにもどこへ行ったのか見えません。階段の下の方では多くのメディアさんがカメラを抱えて待ちかまえています。途方に暮れていましたが、本当に運良く、行列に参加していた方がすぐに見つけ出してくれました。

その現場のすぐ横には、空を飛び、海を歩いて渡ったと言われる修験道の開祖、役小角のお社があります。私たち夫婦は7年前の5月に伊豆山神社で結婚式を挙げました。ちなみに新婚旅行は初島でした。そんな私たちに対して、役小角が神通力でからかったに違いないと私は今でも思っています。

広報あたみ2013．5月号掲載

市長メッセージ 68

新生（リニューアル）熱海の2年目

熱海市長　齊藤　栄

この4月で「新生（リニューアル）熱海」を掲げて2年目となります。庁舎建設、駅前広場整備、新生熱海中学校の3大建設プロジェクトはほぼ予定どおり進み、新市庁舎が建設される旧観光会館跡地は現在更地となっており、その眺めには感慨深いものがあります。

「新生」には「熱海が新しく生まれ変わる」という意味を込めています。60年ぶりの入れ物（庁舎）の一新を契機に、中身（サービス）を見直し充実していきます。その一つとして、来年4月完成予定の新市庁舎では、利用者の利便性向上のための取り組みとして、戸籍、保険、税務などをまとめた、ワンフロアサービスを提供します。

昨年度スタートした市の新事業のひとつ「A-b-iz（熱海市チャレンジ応援センター）」は、特定の事業者を市役所が支援して良いのかとの指摘もありましたが、熱海商工会議所と連携して、新商品の開発、販路の拡大などで市内のいくつかの事業者を支援し、着実に成果を上げております。その様子は全国放送の報道番組でも紹介されました。

この事業の最大の成果は市職員の意識改革です。市役所が個店を支援するというまったく新しい事業に対して、担当職員は日夜全力で試行錯誤を繰り返すことで、事業者の信頼を得ると共に、事業者の視点や悩みを頭ではなく肌感覚で理解できるようになりました。この貴重な経験を他部署にも広く展開することで、市役所が市民や事業者と共に、新生熱海を力強く牽引するエンジンルームとして機能することが実現できると考えています。

広報あたみ2013．4月号掲載

市長メッセージ▲67

ハネムーン・アゲインツアー

熱海市長　齊藤　栄

「かつて新婚旅行で熱海を訪れたカップルに、もう一度今の熱海を楽しんでもらおう！」こんな企画が実現しました。飲食店情報サイトを運営する「ぐるなび」のご協力を得て、いい夫婦の日にちなみ1月22日に、全国から抽選で22組44名のご夫婦を市内のホテルにお招きしました。

到着後、昼は梅園、来宮神社、お宮の松などをバスで市内観光。私は糸川沿いのあたみ桜をご案内しました。驚いたことに、22組のうち丁度ご結婚50周年（金婚式）を迎えられたご夫婦が4組いらっしゃいました。50年前といえば昭和38年、まさに私が生まれた年です。その翌年は東京オリンピック、新幹線の開業と、日本は高度成長の真っ只中でした。ちょうど私の両親も昨年金婚式を迎えています。夜の懇親会では参加者お一人おひとりから当時のお話などを聞かせていただきました。

50年前の熱海は新婚旅行のメッカでした。当時の新聞を調べてみると、「秋の新婚客二千カップル」の見出しがあります。また、新婚専用列車「ことぶき号」に申し込みが殺到していたとのこと。ちなみに料金は一泊二食で3千円から5千円（かなり高級路線）が主流だったそうです。

ツアー終了後、何通かのお礼の手紙をいただきました。「また熱海を訪れます」の言葉もあり、本当に嬉しいことです。今回、私は改めて熱海が日本人にとって思い出の地であることを実感しました。最近は若いカップルにも人気の熱海。熱海は昔も今もロマンチック・プレイスであり続けます。

広報あたみ2013．3月号掲載